「それでも朝は来る」　2024年3月17日
ヨハネによる福音書18章28〜38節　主日礼拝

レント（四旬節）を過ごしています。主イエスの受難を刻みつつ過ごすこの時、やはりアドヴェント（待降節）とは全く違う意味を見出しています。アドヴェントは待ち望むということに重きが置かれます。ローソクを一本ずつ灯しながら、小さな光の中に命を見出してゆく物語です。一方でこのレントはアドヴェントより長い期間、それは主の日を除く四十日の間、あのイスラエルの民が荒野を旅した40年、また主イエスが荒野に引き出されて過ごした40日という象徴的な期間を、自らに向き合う日々として過ごします。

自らに向き合うということを、日常生活の中で意識していることはなかなかないのではないでしょうか。聖書を読んだり、祈るということにおいて、それぞれ神の言葉を聴き、神と対話します。自分の言葉や思いを一旦、こちらにおいて神の言葉を聴く、集中する。そうすることで自分が見えてくるということがあるでしょう。毎日の生活の中で、聖書を読むことが大切であるのは、そのような時間を自分のために作り出すということです。

わたしは単なる聖書通読には何の意味もないと思っています。どれだけたくさん読んだとしても、そこから神のみ心を聴くことをしなかったとしたら無駄なことです。しかし、今日一日の命の糧なるみことばを与えてくださいと聖書を読む時、そこから神の声は聞こえ、それに震えるようにして自らの思いがどこにあるのかを思い知らされます。いや、自分がどこにいるのかを確かめることができると思います。週報に毎週掲載している一日一章ずつみんなで読もうという取り組みも週報のスペースを埋めるだけのものではなく、これによって共に生かされようという一つの運動の形でもあります。

一章だけではなく、翌週の聖書教育の箇所（CSあるいは現在では礼拝）に向けての準備の箇所も同時に併記しています。聖書教育には、その箇所の短いメッセージもあります。それらを一緒に読みながら聴いてゆく時、共同体としてのみことばの交わりが開かれて行きます。一人で読む時とは全く違う読み方で、感じ方で、それぞれの温度や手触りでみことばを持ちよる時、そこに広がりが見えてきます。あらゆるものを超えて行く神の力、神の思い、神の信頼がその交わりの中に吹き込まれます。

きっとそんなことを繰り返しながら、バプテストたちは教会であるということを確かめてきたのではないかと思います。みことばに取り組むとは、自らを確かめることであるのです。バプテスト誌について、これまではみんなでお金を出し合って作る機関紙というスタイルでしたが、4月からは無料となり、紙ベースでの配布は教

会に2部ずつになるそうです。あとは連盟のホームページ、あるいは公式LINEアカウントを作ってそこから配信されるということになっています。

現在、バプテストの聖書日課では出エジプト記を読んでいます。先週はエジプト出発前のファラオとのやり取りが続いています。どうしてもイスラエルの民を去らせたくない頑ななファラオ、エジプトにさまざまな災いが起こされます。それらに出会ってもなお心は変わらず頑なままです。この頑なさはもしかしたらわたしの心であるかもしれないと思いました。ファラオを対象化せず、このファラオの姿こそがわたしの姿ではないかと。神の思いを必死に遠ざけようとするファラオのわがままな姿はまさにこのわたしの姿であると思った時、この出エジプトという解放の出来事は、もしかしたらイスラエルの民ばかりでなく、ファラオをはじめとするエジプトも解放されるべきものではないかと思ったのです。頑ななこのわたしこそが解放されなければならない。そう思った時、この出エジプトという出来事が時間と空間を超えてわたしに迫ってきました。何をおいてでも主の言葉に聴くことが、わたしに与えられている最大の賜物ではないか。解放の一側面だけを切り取るのではなく、双方が解放されて初めて解放となることを学びました。そのような意味で、自分がどこにいるのかをみことばによって見出していくのです。自分がどこにいるのかが分かれば、自ずと祈りが生まれてきます。

さて、今朝与えられている聖書テキストは、ヨハネによる福音書18章、場面は総督官邸、ピラトから尋問を受けるというくだりです。先週読んだ16章最後は、そこまで主イエスの言葉が続いていました。弟子たちに向けて最後に語った言葉たちです。そして17章には祈りの言葉があります。父よ、と呼びかけながら、主なる神に思いを伝えるのと同時に、弟子たちにもこの祈りを聞かせています。噛んで含ませるように、弟子たちの心に行き渡るようにとこれまでのこと、あるいはこれからのこともその祈りの内に祈っています。ここで特徴的なのは、あなたとわたし、そしてわたしたちという言い方で神とイエスご自身とを表しています。17章にわたしたちという言い方が二回出てきますが、いずれもイエスご自身と神というわたしたちです。11節、21節。このような言い方がイエス自身の祈りの中にあるということは希望ではないでしょうか。あなたとわたしと共にいる神であるということを、イエスさまはこんなふうに表してくださっています。

そして、逮捕、大祭司の屋敷へ連行、ペトロの否み、と続きます。イエスさまとずっと歩んできたペトロは、あなたもあの人の弟子の一人ではありませんか？と言われた時、違うと答えてしまう。鶏が鳴くまでに三度、ペトロはイエスさまの弟子であることを打ち消してしまった。あなたのためなら命を捨てます、と息巻いていたペトロも、暗い大祭司の屋敷の中で自分を見失ってしまいました。

今日の箇所はその後、その日の内に総督官邸に引き出されます。ここで何が起こっているのかと言えば、大祭司カイアファの屋敷、ここはサンヘドリンという最

高機関です。ユダヤという宗教世界の頂点、同時にそこは政治的にも頂点でした。そしてそこからローマの支配者である総督のもとへ連れて行かれます。ユダヤからローマへ、一晩のうちに権力から権力へと引き回されます。おそらくこのようなことはそれまでも、これ以降も無かったのではないかと考えます。あのパウロもエルサレム、そしてカイサリアへと護送され二年も放って置かれたとあります。一晩のうちに最高法院から総督官邸に引き出されるということは、それだけ結論が急がれたということを表しています。総督官邸での出来事に注目します。

まず、大祭司の屋敷からイエスを連れてきた人びとはもちろんユダヤ人たちです。異邦人である総督官邸には、自分で入らなかったとあります。それは汚れないで過越の食事をするためであったとあります。過越の食事とは、ちょうど出エジプト記12章、今日の聖書箇所にありました。最後の災いである初子を撃たれるという時、小羊を屠り、その血を入り口の二本の柱と鴨居に塗る。主はその家を過ぎ越される。ということです。血が塗られた家はイスラエルであるとするわけです。その屠った小羊を焼いて食べる、そして酵母を入れないパンに苦菜を添えて食べる。それも腰帯を締め、靴を履いて、杖を持って、急いで食べる。これがもともとの過越の食事です。エジプトを出ようという時、家族で食べる最後の肉料理、それだけでなく、翌朝まで誰も外に出てはならないという家族だけで最後の夜を過ごすことでもあるのです。

自分たちに与えられた使命と将来に向かう約束を握りしめて、分かち合う食事はこれ以降自らのルーツを確かめ合うものになって行ったはずです。主の過越の食事をする度に、解放の出来事を思い起こし、再び使命と約束を分かち合うのです。たとえ総督であっても異邦人であるピラトの官邸に入ってしまえば汚れるということを表しています。ここではピラトがこの人々の前に出てきています。ローマの属州であったこのユダヤ地方では、総督に死刑宣告の権限がありました。それはローマの総督が赴任している地方で、現地でのローマ派の人たちを守るための厳格な規定でもありました。イエスはユダヤ人でありながら、官邸に入っており、ローマ派でもありません。

お前がユダヤ人の王か、と問いかけるピラトはただ権力者として引き出された者にただします。目の前にいるのが誰なのか、それを知らずに最も遠い所にいるのかもしれません。お前の同胞や祭司長たち、みんながわたしの前にお前を引き渡したのだ、いったい何をしたのか。死刑に処す権力を持っている人の言葉です。たまたまこの時の総督がピラトであったという言い方もできます。この人でなければならなかったのか。しかし、主イエスと対峙したのは紛れもなくこの総督ピラトでした。36〜37節

十字架の前に、最後に語ったイエスの言葉たちです。ある意味で、この福音書全体を表す言葉でもあります。ヨハネが最も大切なこととして伝えていると言っても

過言ではありません。真理とは、ギリシャ語でアレーテイア、四つの福音書に19回出てきますが、その内の16回はこのヨハネ福音書にあります。ヨハネ文書と言われる手紙の中にも頻出しています。ヨハネはこの真理を語ろうとしたということもできます。

この死刑判決の前に、ピラトの口から「真理とは何か」と言わしめています。真理とは何でしょうか。なかなか難しい問いです。これについていくつもの議論がなされ、哲学や神学が構築されたと言ってもいいかもしれません。もちろん、神がその人に現れされるものであるということでは、その人が考えるものでもあります。ここでイエスさまは、わたしは真理を証しするために生まれ、そのために世に来た、と言われました。その誕生から、その生涯を通して、またこの最後の場面に向かおうとする時に、その真理を証しするために来たと言われます。

ということはイエスさまの存在、まなざし、言葉、起こされた出来事、出会われた人々と共にあるものでしょう。真理そのものは目には見えません。でも、イエスに出会った人たちを通して明らかにされるものでもあります。主イエスとの関わりを通して立ち上がってくるものであり、確かにここにあると証しするものでもあります。わたしたちもこの真理を証しするために召されているものです。わたしたちを通して真理が明らかにされることをわたしたちは希望として与えられています。

真理とは何か。おそらく自分がどこにいるのかを知らなければ見失ってしまうものです。だからこそわたしたちはみことばに聴き続けるのです。自らを顧み、自分の位置情報を更新し続けるために。この聖書の場面は明け方の出来事です。暗い夜も必ず明けます。わたしたちが待ち望むのはあの夜明けの福音です。闇のようなこの世にもたらされる希望の夜明けを待ち望んで参りましょう。

【お祈り】主なる神さま、あなたの御名をあがめて心から感謝いたします。この礼拝を、そして与えられた御言葉をありがとうございます。

この暗い世にあってわたしたちは、夜明けを待ち望むようにあなたの御言葉を待ち望みます。あなたの御言葉が真理であり、わたしたちの希望だからです。そしてわたしたちも真理を証しし、世の光としての歩みを重ねることができますように。

新しい一週間が始まりました。この週も教会につながる一人ひとりの信仰と健康とを支えてください。それぞれの勤めや学び、日々の営みを祝福してください。子どもたちの健康を守ってください。卒業や進学を迎えた人たちのそれぞれの道を祝し、導いてください。今日それぞれの場所で礼拝する一人ひとりを祝福してください。あなたのみ名によって結ばれていることを感謝いたします。

遠くミャンマーの地で、国軍による暴力が行われています。今、政治に責任ある人たちに正義と良心とを与えてください。NUGに政権を返上する勇気と力を与えてください。そして何より人びとの命と暮らしが守られますように。

わたしたちの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン